

自己評価報告書

平成 23 年 5 月 21 日現在

機関番号：84413

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2012

課題番号：20520673

研究課題名 (和文)：

鎖国期日本に輸入されたヨーロッパ・マジョリカ陶器についての考古学的研究

研究課題名 (英文)：

An archaeological investigation on the European majolica excavated in Japan, imported after the National Isolation in Japan.

研究代表者：松本 啓子 (KEIKO MATSUMOTO)

財団法人大阪市博物館協会・大阪文化財研究所・主任学芸員

研究者番号：2034437

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：近世考古学・国際情報交換・マジョリカ陶器・オランダ連合東インド会社・fogleie 文アルバレロ形壺

1. 研究計画の概要

17 世紀、鎖国下の日本にオランダ連合東インド会社 V.O.C. がヨーロッパから請来したマジョリカ陶器は、多色使いの葉文 fogleie が特徴の、寸胴形壺 (アルバレロ albarelo) が有名で、数例の伝世品とわずかな出土品がある。これらは縦の fogleie 文が描かれることが特徴である。

ヨーロッパでこの fogleie 文は 16 世紀代に流行するが、縦方向の fogleie 文は極めて稀である。壺の形態も含め、ヨーロッパで同一型式の壺は知られておらず、その産地も判明していない。

本研究は大坂出土品を軸に、この陶器壺を現地に持参して実物比較を行うことによって、この産地と流通ルートを探り、ヨーロッパ・日本両地域での社会的背景を探ることを主たる目的とする。

2. 研究の進捗状況

(1) 実物資料の比較から、①大坂出土品は胎土がイタリア・トスカーナの職人の調合と類似し、②彼らがルネサンス期にヨーロッパ各地に赴き、その地で作った可能性がある。③大坂出土品のような寸胴壺はベルギー・オランダにあるが、本品のような fogleie 文との組合せはない。④ヨーロッパのマジョリカで本品のような半透明や乳白色の釉は日常品に多い。

(2) fogleie 文の分布や寸胴壺の使用例から、⑤この寸胴壺 albarelo は薬壺で、カトリック修道院内の病院・薬局で使用され、文様・形態・法量が一律のものが並ぶ。このことから、カトリック修道院からの注文生産が考えられた。そし

て⑥多色使いの fogleie 文使用例の分布から、アルプス西廻りのカトリック巡礼ルートが、主たる伝播ルートであることがわかった。

(3) 出土状況から、⑦法量・形態・焼成・流通時期の似た壺がアムステルダム の 18 世紀初頭改修の堤防から一点出土して、大坂出土品の積出港がアムステルダムだった可能性が高くなった。そして、⑧アムステルダムやユトレヒト、アントワープのマジョリカ工房や商家等の発掘調査で、カトリック・イエズス会が用いるキリストの紋章 I・H・S を描くものや、カトリック教会用のタイルが出土しており、納品先や用途の決まったものが多いことがわかった。つまり、カトリック教会が最大の注文主・納品先で、マジョリカがカトリックと動向を共にしていたことが窺えた。このことはアントワープに残る文献資料とも符合する。

こういった工房や流通拠点の出土品や文献資料から、⑨受注生産が行われたことは明らかで、大量の注文は型や見本といった厳密な仕様で複数の工房に振分けて生産していて、当初考えたような単純な胎土分析だけではマジョリカの産地は推量れないことがわかった。

(4) 日本の状況と照らし合わせると、⑩日本の鎖国はカトリックの排除が目的で、プロテスタントのオランダ連合東インド会社 V.O.C. がカトリック勢力下の高級品であるマジョリカを、どのように入手し、持込めたのかが、問題であることが明らかになった。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

(理由)

研究当初は、どこかに *foglie* 文寸胴壺を常時生産する工房があって、オランダ連合東インド会社がそこから調達して日本に運んだと考えていた。だから、各地に持参し、意見交換をすれば、産地の手がかりはすぐにでも見つかるものと考えていた。しかし、実際に現地へ赴くと、様々な情報や意見があり、これらがなかなか一点に集約せず、寧ろ種々の可能性が浮上するに至った。

例えば、マジョリカはどの地域でも高価で取引されたが、日本出土品はB級品に位置づけられ、日本出土品のような *foglie* 文は16世紀後半を代表する文様で、17世紀後半の日本出土品とは時間幅がある。運搬主体について、*foglie* 文の産地とされるリヨンの研究者から、プロテスタントのV.O.C.ではなく、カトリック・イエズス会が日本に運んだという意見があった。また、宗教改革期を通じてカトリック傘下の、もう一つの *foglie* 文の産地アントワープでは、オランダと敵対するカトリック擁護のスペインとの繋がりが強いマジョリカが生産されていたこと、アントワープと同じオランダ語圏のユトレヒトでは、プロテスタントが優勢となるにも拘らず、カトリックの文様を描くマジョリカが工房跡から出土すること、しかし、別の調査地点ではV.O.C.の船を描くマジョリカが出土し、どこかにV.O.C.と繋がりのある工房が存在していたこと、オランダ語圏のマジョリカ工房では在地的な形態のマジョリカも生産され、これがドイツの工房にも影響を与えたことなどの意見や情報を得た。

これらは一見、相反する事象も含まれるが、それは現在の各国の研究が必ずしも自国を越えてまで進められてはいないため、同じ要素を繋ぎ合わせる作業と、異なる要素を取り除いていく作業がまだあまり行われていないことによる。

また、これらの意見や情報は、すべて各国の研究に基づき、基本的には大きな齟齬はないものなので、大阪出土品を通してこれらを繋ぎ、いままでマジョリカ陶器として一括で考えていた *foglie* 文寸胴壺を、生産と流通形態から細かく分析・抽出しなすことで、第一の目的 (*foglie* 文寸胴壺の産地を絞り込むこと) は達成に近づくと考えられる。

さらに、背景にある宗教改革の社会情勢の一側面を、ネガティブながら、明らかにする可能性もあると考えている。

このように、本研究は生産・流通について有効な情報を得られた上、予想外に

進展した面もある。しかし、決定的な証拠が未把握であるので、おおむね順調に進展していると判断している。

4. 今後の研究の推進方策

今後はヨーロッパの出土品・伝世品のさらなる追跡調査とともに、日本に到達するまでの道筋の中の地域、たとえばオランダ連合東インド会社V.O.C.が拠点とした台湾や東南アジアの出土品・伝世品の調査と、受容する際の各地域の社会的背景を探る。

具体的には、(1)ヨーロッパにおいては、カトリック社会の中で *Foglie* 文寸胴壺の分布範囲がさらに限定できるのかどうかと、(2)プロテスタント優勢地域では病院・薬局の動向(カトリック修道院から離れ存続したのかどうかと、そこでどんな壺を使用し、どこでそれらを調達したのか等)を引き続き探っていきたい。

(3)ヨーロッパ以外では、V.O.C.が交易に深くかかわった地域でのマジョリカの有無、キリスト教との関わりを軸に、日本との比較・検討を行う。

あわせて、(4)日本では、出土品・伝世品の更なる調査とともに、カトリックを追放するためにとった鎖国政策渦中の輸入品であることに注目し、16・17世紀のカトリック・プロテスタント双方の動向とV.O.C.との関係についても研究を進めていきたい。

また、(5)研究成果が考古学のみならず、歴史(世界史)上の多岐の分野にわたることが明らかになってきたので、この研究期間中にこれまでの成果を一冊の図書にまとめ、(6)学会での発表を行うべく、準備をしている。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

松本 啓子「鎖国期のヨーロッパ陶器をめぐって」栄原永遠男編『日本古代の王権と社会』pp. 473-491、塙書房、2010年10月1日、査読あり。

[学会発表] (計2件)

①松本 啓子 2010年5月23日「鎖国期のヨーロッパ・マジョリカ陶器をめぐって—近世大坂・鎖国直後のアルパレルロ形壺—」日本考古学協会第76回総会、於：国士舘大学

②松本 啓子 2008年5月25日「日本出土のヨーロッパ・マジョリカ陶器についての考古学的研究」日本考古学協会第74回総会、於：東海大学